

## クメール瓦の製作技法

アンコール・ワット(Angkor Wat)や王都アンコール・トム(Angkor Thom)を築上げたクメール文明。その王朝末期にこの地を訪れた、元の周達観は『真臘風土記』(14世紀初頭)を著して、当時の風土・文物に関する貴重な記録を伝えた。これを読むと、当時の仏教寺院やヒンドゥー寺院が石造あるいは磚築だったのに対して、王宮(ピミアナカス、Phemianakas)の建物は、「その正殿の瓦は鉛で作り、ほかはみな土瓦で黄色である」とあって木造瓦葺だったことがわかる。実際、石造寺院の屋根も瓦葺を模した造形を採用しているし、壁体だけを石積みないしは磚積みとし、屋根には木の桁材を架して瓦葺で仕上げた建物は、バンテアイ・スレイ(Banteay Srei)やタブローム(Ta Prohm)など多くの寺院跡で目にすることができる。また、遺跡からは、多量の瓦が発見されるので、クメール王朝において、瓦は主要な建築材料の一つだったと過言ではない。

クメールの瓦研究は、1973年に発表されたジャック・デュマルセ(Jacque Dumarçay)の成果が金字塔としてそびえたっている。その内容は、瓦の種類や軒先瓦の型式分類を含み、瓦の使用法(葺き方)までおよんだ詳細なものだ。論文の主眼がクメール建築の構造研究に向いていたから、瓦の考古学的研究としてはもっとつっこんでほしい点もなくはないが、建築学の立場から大局を把握しようとしたデュマルセの研究は今日でもその意義を失っていない。

瓦は当然、窯で焼く。その一つ、タニ瓦窯群は、アンコール・ワットから東北東に約20kmはなれたルン・タエック村にある。1995年8月にその存在を確認し、その後、1999~2000年にかけて奈文研はそのなかの1基(A6号窯)を発掘調査した。遺跡の状況、および大量に出土したクメール陶器と瓦の詳細は現在作成中の報告書に譲るとして、瓦の製作技法について気づいた点を書き記したいと思う。

クメールの瓦は、丸瓦・平瓦が基本的な構成で、丸瓦の先に紋様部分(瓦当)をつけた軒先瓦と、棟に並べる棟飾瓦があり、ほかにいくつかの道具瓦が確認できる。これらには無釉瓦と施釉瓦がある。

丸瓦と平瓦の製作技法 出土した丸・平瓦のほとんどは無釉の瓦だった。丸瓦は、截頭円錐形の筒を二分した形で、和風にいうと「行基式」。全長24~28cm、径13~15cmの規格。凸面はていねいにナデ調整してあるが、凹面は調整が粗雑で粘土紐の継ぎ目がはっきりとみえる。しかし、布の圧痕はない。模骨(芯)を使わないで粘土紐を巻き上げて筒をつくり、これを二分割して丸瓦としている。凹面には、粘土の小塊を貼り付けた突起や突帯がある。

平瓦は、中央が平板で両側辺が折れて立ち上がる。丸瓦同様、狭端と広端の区別はある。凹面には粘土紐の継ぎ目がみえるが、凸面はていねいにナデ調整してある。だが、丸瓦とは逆に凹面を上にして使うので、凹面にも多少のナデ調整を加えており、突帯は凸面側につく。

平瓦は、その全長が丸瓦とおおむね等しく、しかも狭端と広端の外周の長さは丸瓦とほぼ一致する。さらに、平瓦凹面の屈折部を観察すると、粘土紐の継ぎ目が何かにあたって潰れていることがわかる。これらからすると、平瓦は、丸瓦を直方体の台に据え、凸面から押さええて断面形を矩形に加工したものと判断してよい。凸面に叩きの痕跡は認められないので、手で押さえただろう。

施釉した丸瓦と平瓦は全体を確認できるものがないが、無釉のものに比べると薄手で、丸・平瓦とも凹面をていねいにナデ調整して粘土紐の継ぎ目をみせない。

軒先瓦の製作技法 クメールの軒先瓦は、丸瓦の先にアーチ形ないし尖頭アーチ形の瓦当を取り付けたもので、平瓦に紋様を付けたものはない。瓦当紋様は型(范型)で作成する。瓦当の下辺は、直線的になるものが多いが、左右2ヶ所を三角形に切り欠いたものがある。切り欠きは、平瓦側辺の立ち上がり部分を受けるための加工だ。

タニA6号窯から出土した軒先瓦は、基本的に花卉紋(クメールロータス)を表現する。計21種を確認した。多くは、花卉3枚をならべ、中央の花弁には稜線がある。花弁の周囲には珠紋を配置するものとこれを欠くものがあり、ほかに放射紋を飾るものがある。周囲に珠紋のない型式は、紋様が平板でしかも花卉紋が崩れた印象のものが多い。型式的に遅れるのだろうか。このほかに、無紋の瓦当が1種類ある。

施釉のある軒先瓦はともに小破片で全形をうかがい知れないが、下辺には切り欠きがあることや瓦当周囲を火炎紋風に加工することがわかる。

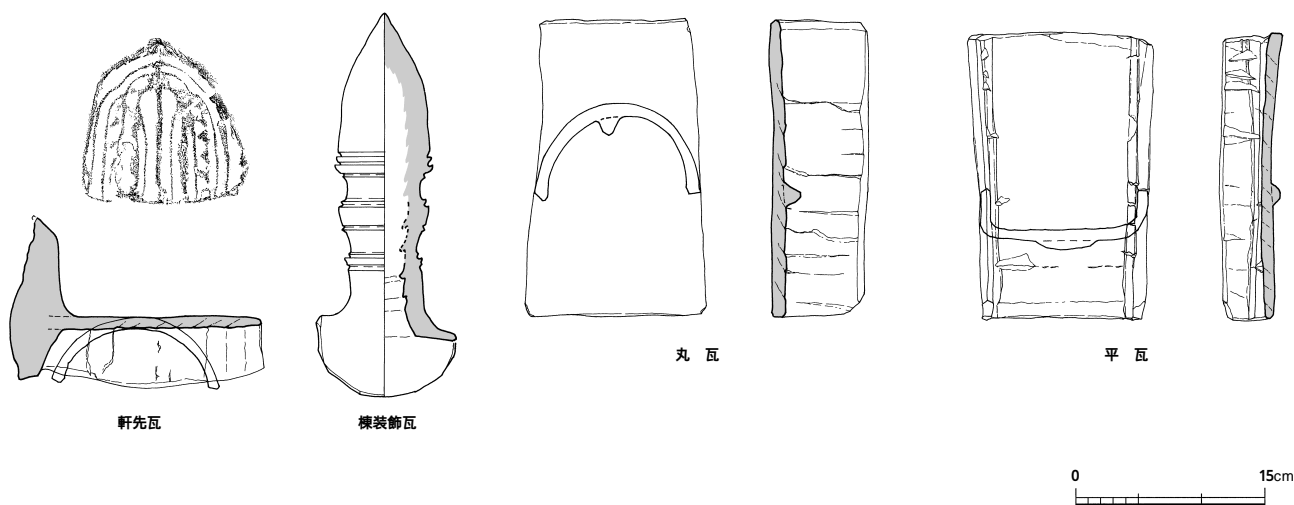


図7 クメール瓦各種 1:6

軒先瓦の丸瓦部が遺存している例をみると、粘土紐巻き上げの技法は共通するが、丸瓦部は全長16~19cm、径10~12cmしかなく、ふつうの丸瓦よりもかなり小さく作られている。デュマルセが指摘しているように、この大きさだと軒先瓦はその次にのる丸瓦が完全にかぶってしまう（口絵図版2）。瓦当部と丸瓦部との接合に際して、先端を削ったり、刻み目を入れるなどの加工をおこなった例は確認しなかった。

**棟装飾瓦の製作技法** 先端を砲弾形に尖らせ、途中に扁平な球形装飾を付けた瓦製品がある。石造寺院の造形から判断して、大棟などに並べた瓦だ。この瓦は、直立する装飾部分を粘土紐巻き上げで作った後、回転台の上で細部の造形をおこない、これを鞍形の台と接合する。

鞍形の台部は、凹面に粘土紐の継ぎ目を残すこと、端部が薄くて丸く終わるものと、分厚くて矩形に終わるものがあることなどから、丸瓦を半分に切ったものを素材としていることが明らかだ。半裁した丸瓦の中央に穴をあけて、そこに装飾部を差し込み、さらに台部周囲を切り取って鞍形に加工する手法が復元できる。

**クメール瓦の技法体系** タニA6号窯出土瓦からみると、クメール瓦は丸瓦を基本とした製作技法体系をもつ、といえよう。丸瓦を瓦当部に接合して軒先瓦を作るのは特殊でも何でもないが、平瓦が丸瓦を変形させて作られる特徴はそのことをよく示している。棟装飾瓦もその台部は丸瓦を素材としており、基本的にはすべての瓦が粘土紐を巻き上げた粘土円筒から製作される。

模骨作りを見慣れた目にはこれらは新鮮に映るが、秦・漢代の中国や漢城期の百済では粘土紐巻き上げの粘土円筒（泥条版築）が瓦の素材となっていた。技法的にはそれにつながるのだろうか。

ミャンマーの瓦を紹介した上原真人氏は、この地には古くには中国系の瓦があったが、その後、ローマ系やフラットタイル系が登場し、後者がもっとも長い間使われたという。ローマ系瓦は横断面矩形の瓦で、同形の瓦をかぶせて丸瓦として使う。フラットタイル系の瓦は裏面に横棧のついた板状の瓦。近年、インドの祇園精舎近傍の瓦が報告されたが、そこによく似たものがある。

これらと比較すると、クメール瓦はミャンマーのローマ系瓦と平瓦は似ているが、丸瓦は中国的といえよう。いいとこ取り、かもしれないが、なにより、一つの技法体系をそなえた瓦作りがおこなわれていることは間違いないだろう。カンボディアには凹面に布圧痕（布目）のある瓦もあるらしいので、今後、クメール瓦の系譜と体系化の過程がわかってくれば、東南アジアの造瓦の歴史という、尽きせぬ泉がくめるやもしれぬ。（花谷 浩）

#### 参考文献

- 周達観（和田久徳訳注）『真臘風土記 アンコール期のカンボジア』東洋文庫507、1989。
- ジャック・デュマルセ（松原容子訳）「クメールの小屋組みと瓦」『アンコール文化遺産保護共同研究報告書』、奈文研、1997（Dumarçay, Jacques "Chapentes et tuiles Khmères" Ecole Française d'Extrême-Orient, 1973）。
- 上原真人「ミャンマーで見た瓦」『瓦を読む』古代史発掘11、講談社、1997。
- 関西大学『祇園精舎 サハート遺跡発掘調査報告書』1997。
- 松尾信裕「クメール窯跡群の発見」『アンコール遺跡の考古学』中尾芳治編、連合出版、2000。
- 丸井雅子「アンコール地域の変遷に関わる一考察：パンテアイ・クデイ遺跡の展開と出土瓦片」『東南アジア考古学会発表要旨』2003。